高校２年生

国際理解・人権・平和

中野和之・川合勇治
寺井　一・福谷　敏
石川久美・仲田恵子

【抄録】 高２は、学年テーマ「国際理解・人権・平和」に沿った各グループ別によるフィールドワークを中心とした学習の取り組みを行った。単なるグループ学習に終わることなく、個々人の理解を深めるため、プレ研究発表や映画「月桃の花」の鑑賞、さらに大学教官による講義を行った。当初、漠然とした自分たちのテーマ設定が、上記の学習を通じて、より具体的なものへと変わり、９月末ごろには訪問先のアポイントを取ることが出来た。フィールドワークの基本である「人と会い、人を知り、自分を知る」活動を通して、サブテーマにある「沖縄から世界を考える」視点の広がりを持ったものと確信している。

【キーワード】 沖縄　米軍基地　アブチラガマ　平和　沖縄戦　工芸品　ひめゆりの塔　エイサー　民族　差別

１．はじめに

2001年９月11日、ニューヨーク上空を旋回した旅客機が突如、国際貿易センタービルに突っ込んでから一年を過ぎようとする時期に沖縄への研究旅行を実施した。当初、沖縄に駐留する米軍へのテロ攻撃を考慮して、沖縄への研究旅行を見合わせるかどうか微妙な時期もあったが、一応の収束を見て実施できた。その意味でも、米軍と沖縄の関係を肌身に感じての研究が深められたのではないのかと思う。

学年テーマである国際理解・人権・平和は、県の全面積に対して一割の土地が米軍に使用されている沖縄（沖縄本島では二割）において、まさしく格好のテーマとなろう。未だに基地周辺の住民への米軍兵士による暴行事件が新聞を賑わしている現状は、独立した法治国家である我が国の主権が日米地位協定によって、脅かされている姿を私たちの眼前にさらけ出している。占領されてから今日まで戦時状態を常に意識させられている沖縄は、まさしく平和学習にとって、また人権学習にとって重要な課題を与えてくれる。

古くから海上交通の要衝として栄えてきた沖縄の文化は、東アジア世界の文化の融合としてみることも出来る。明治維新以後、沖縄の人々は海を越えて太平洋上の各地へと移民していった。ハワイ・フィリピンなどに今でもその子孫が生活している。そうした開放性を持つ沖縄の風土や文化に接することにより、国際理解とは何かを考える機会となったであろう。

以下、一年間の学習の軌跡を提示していく。

２．学年テーマと目標

今年度の学年テーマは、「平和を学ぶ」となった。目標については、

⑴　米軍基地の集中している沖縄でのフィールドワークを軸として、平和について学ぶ。
⑵　現在も世界の紛争に介入する米軍の基地が沖縄に存在し、その現状を見聞することにより、世界的な広がりを持つ視野を獲得する。

上記の二点を目標に掲げた。サブテーマとして「沖縄から世界を考える」を設定し、目標の⑵を主眼に据えた。

３．学年課題

目標を具体的なものとするための課題として、次の二点を設定した。

⑴　平和についての考え方を興味・関心に基づく学習活動を通して、自分との関わりを考察する。
⑵　沖縄という特色ある地域を学習することにより、幅広く世界を視野に入れ、現在の日本の置かれた状況について理解する。

４．沖縄研究旅行の意義

沖縄研究旅行は、国内で唯一の戦場となった沖縄の過去を知ることから始まる。過去に行われた沖縄戦の戦跡を辿ることにより、戦争に巻き込まれた市民の姿を想像し、自分の中で沖縄戦の具体像を結ぶ作業が、現代に生きる私たち日本人の平和に対する考え方の再点検となる。また、現在も米軍の基地を抱え、攻撃目標となる危険性を持っている事実を、沖縄の米軍基地の実情を分析することにより、平和の問題が世界的規模で考えなければならない課題となる。日頃、漠然とした平和感覚しか持てない私たちにとって、「平和とは何か」を掘り下げて考えるきっかけを作る場となる。

平和学習とともに、沖縄の持つ独自の文化に触れつつ、国際性豊かな沖縄にも目を向け、海洋を自由に往来していた沖縄の人々の生活などを体感し、自分の世界を広げる異文化学習の役割も担っている。食事などのライフスタイルや民族工芸品、民謡など、具体的な調査研究を通じて、自分の知らない世界を知り、視野を広げる機会となる。

５．一年間の活動記録

４月11日　オリエンテーション　教育学部植田健男先生の特別講義
「共同の中での「学び合い」」（フィールドワークについて）
４月25日　プレ研究グループ分け・プレ研究テーマ決め
５月２日　プレ研究調査
５月９日　プレ研究調査、発表討論準備
５月23日　プレ研究発表討論準備
５月30日　プレ研究発表
６月６日　研究グループ決定と研究テーマ決め
６月20日　研究テーマ決め、研究テーマ追求活動
６月27日　研究テーマ追求活動
７月11日　一日総合大学　２学部７研究科９名による特別講座

夏休み

９月５日　フィールドワーク行程の検討
９月12日　フィールドワーク行程の決定
９月25日　文学部若尾祐司先生の特別講義　「戦後沖縄の米軍基地」
９月26日　映画「月桃の花」上映会
10月４日　フィールドワーク訪問先のアポ取り締切
10月10日　フィールドワーク訪問先への依頼書作成・発送・質問事項の整理
10月17日　各係別役割分担決定
10月31日　フィールドワーク行程の最終確認
11月11日　事前指導
11月12～16日　沖縄研究旅行
11月18日　事後指導　お礼状書き
11月21日　フィールドワーク班別発表会準備　役割分担
12月５日　フィールドワーク判別発表会準備
12月12日　フィールドワーク班別発表会

冬休み

１月16日　研究集録準備
１月23日　研究集録準備
１月30日　高１へのクラス別発表会準備、集録原稿チェック
２月６日　高１へのクラス別発表、討論会準備
２月13日　討論会
２月20日　総合人間科を通してのまとめ小論文作成
３月13日　研究集録読み

６．プレ研究

沖縄研究旅行での研究テーマ決定の前に、それぞれ事前学習としてプレ研究を行った。１クラス６班に分かれ、６つのテーマに沿って学習活動を進めた。
その結果を各クラス毎に発表という形式で授業を行い、沖縄をいろいろな角度から紹介した。

⑴プレ研究のテーマ

①沖縄の自然（気候、風土、動植物、リゾート開発と環境破壊など）
②基地問題（安保条約、地位協定、基地と人権の問題、基地の及ぼす影響）
③沖縄の食生活（食文化、長寿食など）
④沖縄の産業（観光リゾート、基地産業、サトウキビ、パイナップル、生花産業）
⑤沖縄の文化（歴史、伝統工芸、踊り、民謡、音楽、沖縄サミットなど）
⑥沖縄戦（沖縄戦の真実と背景、皇民化教育、地上戦、ひめゆり部隊など）

⑵プレ研究の概要

教室でプレゼンターなどを使用して、プレ研究発表を各班毎に行った。主な内容としては、沖縄クイズをクラス全員に実施、調理室を使ってカステラ菓子のサーターアンダギーを調理して、これもクラス全員での試食、ビデオ映像を使っての沖縄戦、インターネットを利用してのパイナップル産業の現状、図書資料などで調べた「さんご」、新聞報道などから調べた基地問題といった多彩なものであった。

７．沖縄研究旅行行程

第一日（11月12日　火曜日）

名古屋空港　→　那覇空港　→
９：50集合　10：55発　13：25着　14：00

糸数壕　→　首里城公園　→
14：40　15：30　16：10　17：00

那覇市内ホテル泊　講演　安里要江さん
17：45着

アブチラガマ（糸数壕）における平和セレモニー

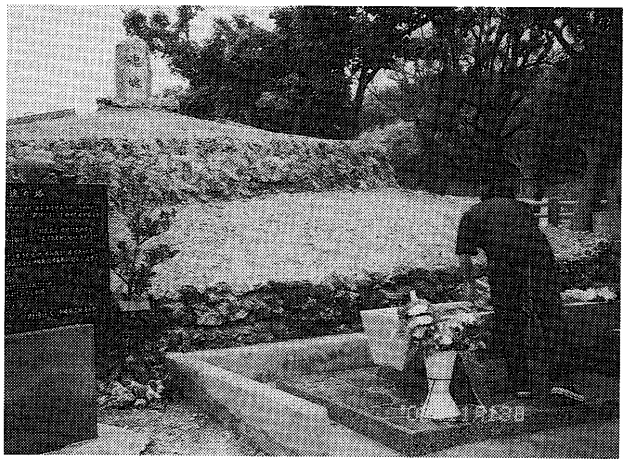
第二日（11月13日　水曜日）

ホテル発　→　嘉数高地　→　平和祈念公園
8：00　　8：40　　9：30　　10：15着

（韓国人慰霊の塔－平和の礎－平和祈念資料館）
12：15発

→　昼食（ひめゆり会館）　→　魂魄の塔　→
12：30　　13：30　　13：45　14：35

ひめゆりの塔　→　那覇市内ホテル泊
14：50　16：30　　17：30着
鑑賞　エイサー沖縄音楽

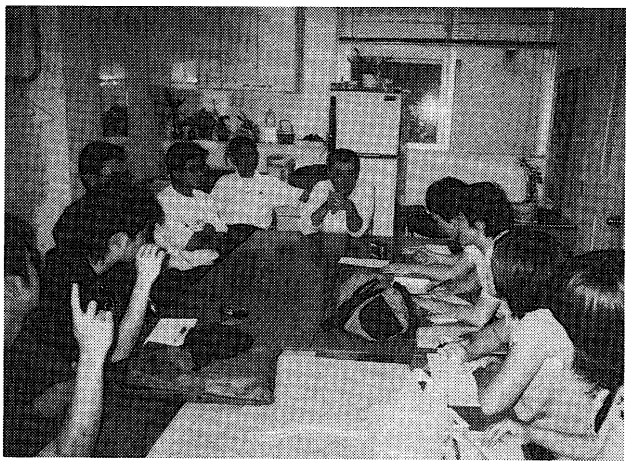


魂魄の塔における献鶴式

第三日（11月14日　木曜日）

ホテル発　→　ジャンボタクシーによるフィールドワーク
8：30

→　名護市ホテル
15：30着



フィールドワーク先にて（B－2班）

第四日（11月15日　金曜日）

ホテル発　→　安保の見える丘　→　琉球村
8：20　　9：30　10：10　　10：20

（見学・昼食）→ 那覇空港　→　名古屋空港
11：50　　13：15　14：05発　16：00着・解散

琉球村にて

フィールドワークテーマ

A－1班　珊瑚礁について
A－2班　沖縄の人々と差別
A－3班　沖縄の文化
A－4班　おばあと健康
A－5班　沖縄料理
A－6班　自然と戦争

B－1班　琉球いまむかし
B－2班　沖縄の食
B－3班　沖縄の文化
B－4班　沖縄の文化
B－5班　海の生き物ｉｎ沖縄
B－6班　沖縄の建築構造～シーサーができるまで～

Ｃ－１班　　ウルルン滞在記ｉｎ沖縄
Ｃ－２班　　沖縄の美しい自然
Ｃ－３班　　沖縄の伝統的なお菓子
Ｃ－４班　　基地の現状とその後
Ｃ－５班　　いっぱい体験そばツアー
Ｃ－６班　　沖縄の伝統工芸

沖縄研究旅行アンケート結果について

研究旅行後、研究旅行に関するアンケートを行った。（数字は119名中の数）

沖縄の訪問地について、「強く印象に残った」項目は、103票のアブチラガマ（糸数壕）を先頭にして、以下、ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館（45票）、平和祈念資料館（31票）、米須海岸（31票）、平和の礎（29票）、安保の見える丘（28票）、首里城公園（23票）、韓国人慰霊の塔（16票）、嘉数高地（12票）、魂魄の塔（８票）という結果と相成った。アブチラガマが一番印象に強いのは、壕の中で明かりを消した状態での黙祷が影響を与えていると思われる。「実際そこに行ってみると、闇。もちろん懐中電灯は持っていたが、そこで生活していた人のことを体験すべく、全ての灯りを消した。気が狂いそうになった。すべてを包み込む闇、静寂、恐怖・・・」（Ｋ君）というような感想が多くあり、セレモニーではあったが、生徒にとっては追体験できたようである。

セレモニー関係では、第二日目に行われたエイサーが92票と74票の平和セレモニーを抜いて「とても印象に残った」ようだ。机上の学習とは異なり、沖縄の伝統音楽で踊り歌ったことが印象深かったようである。フィールドワークについては、約９割の生徒が肯定的な結果を選んだ。

８．課題と展望（むすびにかえて）

生徒の感想を読んでみると大きく分けて、２つに分かれた。一番多かったのが戦争と平和に関するものである。次が文化に関するものであった。以下、それらを例示しながら、課題と展望を考えてみたい。

「現在、沖縄の基地問題をめぐって日本中でアメリカ軍基地の撤退が叫ばれているけれど、僕はその事に関心が特にあったわけでもないし、否定しているわけでもありませんでした。恥ずかしいことだけど自分にはあまり関係がない事だと思っていたし、むしろアメリカ軍が日本に駐留していた方がいざという時に、あの軍事力が役に立つのではと思っていたくらいでした。」（Ｍ君）

「テレビのＣＭで航空会社が沖縄を宣伝しているのをよく見た。特に夏、南国風の海や空を背景にしてＳＭＡＰが出演していた。私はそれを見て沖縄に行きたい、と強く思った。研究旅行でのテーマは、「沖縄の美しい自然」で、はっきり言ってしまえば沖縄に観光しに行ったようなものである」（Ｈさん）

と、事前学習をしていたにもかかわらず、自分とは遠い距離にあるものと考えていたようである。それが、ガマでの平和セレモニーや平和講演など、眼前の人の体験談によって、Ｍ君は「しかし、今考えてみると、戦時中に比べ、はるかに平和な今の日本で、他国の軍隊が駐留しているということを否定するどころか、むしろ、肯定の立場にいることがとても情けなく思えてきました。軍隊を肯定する＝戦争を肯定することだと思います。戦争の原因となる軍隊は一刻も早くこの国から追い出すことをもっと政府と国民が一丸となって行っていくことが平和への第一歩だと思う。」と、最初に述べていた「アメリカ軍が日本に駐留していた方がいざという時に、あの軍事力が役に立つ」という考えを否定するに至る。またＨさんも同様に「まず初日、空港に着いた時から、わたしはとにかく南国気分に浸っていた。が、初めの行き先は、なんとガマだったのだ。もう一気にその気分は崩れ去った。ガマの中に入って、メリーさん（現地ガイド）のお話で、沖縄戦の悲惨さを知った。旅行前に「月桃の花」を見てはいたが、実際に行ってみて、その悲しみ、むごさを知った。」という変化を見せている。

「沖縄へ行って、様々な戦争の跡を自分の体で感じてきて、初めて戦争が現実にあったものだと理解できた気がする。私はこうしてやっと戦争というものに気づくことができたけれど、きっと、これから先、本当の闇を知らない人は増えていくと思う。それが、「平和になる」ということかもしれない。でも過去の苦しみ、戦争の恐ろしさを忘れていくことは絶対に駄目だ。」（Ｓさん）

「沖縄の沢山の人たちに聞いて少し分かったことは、果たして戦争をするのが人々の幸せを願ってやるものなのかということ。戦争をすれば必ず犠牲になる人間も沢山いる。一体そんなことの繰り返しで世界は一体何を考えて何を得ようとしているのか僕には分からない。」（Ｓ君）

人と出会い、そして対話することから、新たな事実を知ることができる。総合人間科の目指しているものは、正に、この「人との出会い」なのである。「人との出会い」について、Ｙさんは、次のような感想を書いている。

「インタビューとは人と直接会って話を聞くことだ。私たちは多くの場合、何かについて詳しく知るためにインタビューという方法を使う。人と会うというのはとても貴重なことだ。インタビューの内容は、書物やインターネットからでは得られない、その人の話からでしか得られないものになるべきはずだ。インタビューの成果を最大にするために、他の方法で得られる知識をできるかぎり集め、十分に準備をして臨めば、実り多いインタビューになっただろう。

しかし、総人のインタビューでは、内容的に不十分でも、人に会いに行くことによって大きなものを得た。それは、大人の働いている現場を見る、ということだ。」

「大人の働いている現場を見る」ことの重要性に気づいたのは卓見である。現場に立ち、それに関係する人々からの話を聞くことによって、より理解が深まる。ガマなどでの平和セレモニーは、その点からも強く印象づけられたのであろう。こうした現場に立って初めて考え始める生徒とは違って、日頃から社会事象に強い関心を持った生徒もいる。K君は、一般的に観光の島としての沖縄のイメージに対して、「沖縄が戦場となった島だというイメージが少ない」理由を３つ挙げている。

「まず一つは、戦争に関する報道が、時季によって偏ることが原因だと思う。太平洋戦争の報道は、一年を通して八月、とくにその中旬までがそのほとんどを占めているといえる。」として、戦争報道のセレモニー化に対して危惧している。さらに「また、二つ目は、日本人の平和慣れだろうか。平和すぎる日常において、平和の尊さを人々は忘れていやしないか。耳にする中東への戦争の問題も他人事で、大事なのは日本の関わり方」であるとして、最近の自衛隊派遣のあり方に疑問を呈している。そして、最後に平和教育のあり方を指摘する。「全国の学校で平和教育は行われているのだろうか。日本史で習った太平洋戦争は、客観的すぎて、日本が加害者にも被害者にも見えてこない。ただの「日本」で、今住んでいる国の話には思えない。」とし、「平和を尊重する国の人々が、十分に平和教育を受けていないのではないだろうか」と疑問を投げかけている。

平和の尊さに気づいて生徒もいる反面、少数ではあるが、米軍基地の存在について肯定的な意見もあった。

「今の日本にアメリカに打ち勝つ力がある。かといえば、ない。だから沖縄から基地をなくすなんて無理だ。それに、北朝鮮という何を考えているんだかさっぱりわからない不安な国が隣国なんだから、それから守ってもらうためにも基地は必要である。」（Kさん）

Kさんの感想は、昨今のマスコミを賑わしている論調と同じである。色々な情報が飛び交っている中に私たちは生活している。そうした中で、耳障りの良い勇ましい論調が受けたりしている。安易にそうした発想に飛びつくのではなく、冷静に深く考えていこうとする姿勢が必要となる。そのための、自分で考え、まとめていく能力を総合学習は育成していくものと考える。その面から言うと、我が校の総合学習指導もまだまだ発展途上といえるのであろうか。

Aさんは、「楽しい」、「悲しい」という情緒的側面で感想を述べている。

「班でのフィールドワークで初めて違うタイプと出会った。それは、友軍によって助けられ、米兵によって生きてこれた（救済ヵ）人だった。私たちは、この人に偶然にもお話を聞くことができたのだが、初めのうちはかなりとまどった。今までと逆のタイプだったからだ。でも、とまどったということは、心のどこかで悲しいお話が聞きたい（聞ける）という先入観があったのではないだろうか。何故、こんな風に思うようになってしまったんだろう。確かに悲しいお話の方が多かった。でも、実際にその人は、米軍は親切でやさしかった。普通に生活していた、と言っていた。他の班から戦争に関係のないテーマでも話を聞いてみると、楽しい話ばかりで、沖縄の人はとても温かく楽しく過ごしている様だった。」

戦争の悲惨さなどは、事前学習で十分に説明し、さらに現在の米軍基地の抱える問題点を学習してきている。Aさんは、こうした学習に対する心理的な反発を感じていたのかもしれない。教材として、やはり悲惨な場面を取り上げざるを得ない以上、こうした反応も必然的に出てくる。

文化に関するものについては、それぞれ自分の関心に沿って感想を寄せている。

「沖縄のお菓子には、料理に豚が良く使われているように、黒糖が多く使われています。これは、私の予想だけど、中国からさとうきびが入ってきたからだと思います。沖縄にはたくさんのさとうきび畑があり、そこから黒糖が採れます。黒糖は健康にも良いと言うことで、つまり沖縄のお菓子はとてもヘルシーなのです。」（Tさん）

「日本の工芸品といえば、いかにも日本らしい落ち着いた色が着けられているが、沖縄の織物などは黄色などの鮮やかな着色がなされている。その色彩感覚は日本ではなく、東南アジアに近いと思われる。そして、それらは高温な沖縄に適した編み方を東南アジアの技術を取り入れて完成している。」（N君）　Tさんはお菓子、N君は工芸品を通して沖縄を考えようと試みている。Tさんは「お菓子について調べていくと、他の国との関わりや、文化の違いなど興味深いことがあったので、機会があれば、これからも調べていきたいです。」と今後への展望を持った学習が出来たようである。またT君も「沖縄の文化は中国や東南アジアやアメリカの影響を多く受けて成長していった沖縄独自の国際色豊かな文化といえるのではないだろうか。本土の人が沖縄へよく観光のため出かけるのは、日本にも海外にもない独特な雰囲気や文化に触れるためなのだろうか。」と結論づけしている。生徒にとって興味のある事を学習することは、内容を深めるばかりではなく、そこから派生する問題も考える機会を持つことになる。AJさんは「総合人間科では、生徒一人一人が先生になれる場であり、お互い学び会える場であると思う」と感想に書いていたが、まさしく、その言葉の通り、Tさん、N君は、国際理解の一歩を「お菓子」「工芸品」で踏みだし、内容の深さから私たちを引き込む。その他には文化の持つ「侵略性」に気づきつつ沖縄の文化について語ったものもある。

「僕の嫌う「民族」や「文化」は、それを本当に沖縄の人々のように大切には思っておらず、ただ自分たちの欲のために文化や民族というものを利用しているだけのよ

うな、そんな気がする。だからお互いに相手の文化や民族を傷つけることが容易に出来るのだと思った。では何故沖縄の人々はこのように僕が嫌うような文化・民族とは違ったそれを保つことが出来ているのだろうか。僕はそれは沖縄の人々が傷つけられる苦しさを知っているからだと思う。沖縄はその文化を抑えられた悲しい過去を持っているから。その過去があるから素晴らしい文化を保ち続けることが出来るのだと思う。それは弱者の特権のようにも思える。」（Ｏ君）

大和と沖縄の文化の相違から、異文化理解について疑問を提示したＡＩさんは「異文化とは、どの程度の違いから始まるのでしょうか。家ごとの独自の味付けは異文化とは言わないのに、同じように美味しいお国料理は異文化になるのです。人のすることだから、個性と思うだけで、身構える程の事でもないと思われるのです。けれど、異質な印象を受けることもありますから、線引きが難しいということでしょう。」と、あいまいさを残しながら問題提議を行っている。

異文化に対して、まったく新しい切り口で感想を書いたＮ君は「メリーさんの「価値観の異なる相手とは、距離をおくことも大切」というお話は新鮮で、現実にそくしているように思えました。相手を理解することも大切ですが、理解してみて「これは駄目だ」と思ったら、相手のことを尊重しながら、相手の不可侵の領域には立ち入らないべきことも、また一つの真理であるように思いました。」と、異文化の相手との接し方に言及し、話し合いの難しさを示している。

座学としての学習とは違い、総合学習はフィールドワークを取り入れた現場での聞き取り調査から生徒が体感できる要素を持っている。人に会い、人と話す事から、より深く問題を掘り下げることができる。そうした利点が総合学習にはある。ＡＪさんも言うように「生徒一人一人が先生となる」ことが出来る場を作り出してくれる。まだまだ、修正していかなければならない面が多々あるが、人に出会い、人と対話する事は絶対に揺るがす事の出来ない根幹である。

この学習を通して彼らが将来、自らの判断や自らの行動で色々な課題を乗り越えていくことを願う。